

活動報告

「ワークショップ・ウズベキスタンにおける 文化遺産保存修復技術実技講習」について

古 庄 浩 明

＜基礎データ＞

事業名：ウズベキスタンにおける文化遺産保存修復技術実技講習

事業実施期間：2011年9月2日から2011年10月3日

事業実施国・都市：ウズベキスタン共和国 タシュケント

場所：ベーシックコース 平山郁夫国際文化のキャラバンサライ

プロフェッショナルコース 国立歴史博物館

主催：国際交流基金 平山郁夫国際文化のキャラバンサライ 国立歴史博物館

対象：ベーシックコース 考古学・保存修復学を学ぶ大学生・専門学校生

プロフェッショナルコース 博物館職員や実際に保存修復の経験を持つ学生

内容：ベーシックコース 考古学・保存修復学の基礎

プロフェッショナルコース 塑像の修復と遺物写真撮影の理論と実践

講師：古庄浩明（国士舘大学21世紀アジア学部 非常勤講師）

青木繁夫（サイバー大学教授）

杉本和樹（奈良文化財研究所・西大寺フォト）

井上洋一（東京国立博物館 企画課長）

井上主税（榎原考古学研究所 主任技師）

犬竹和（大正大学 非常勤講師）

シェルナザロフ・シャメイディン（陶芸家）

サフチュク・クルバノフ（グレートシルクロード編集長）

バホディール・ツルグノフ（芸術学研究所研究部長）

ノディル・ノルマートフ（芸術アカデミー情報と国際関係部長）

アクマル・ウルマゾフ（芸術学研究所研究部研究員）

資金提供：国際交流基金

助成：文化財保護・芸術研究助成財団

助言：和光大学名誉教授 前田耕作 東京文化財研究所 山内和也

ウズベキスタン共和国文化・スポーツ省大臣 ツルスナリ・クズイェフ

国立芸術学研究所長 シャキル・ピダーエフ

後援：ウズベキスタン共和国芸術アカデミー 国立芸術学研究所

協力：在ウズベキスタン日本大使館 在日ウズベキスタン共和国大使館

はじめに

ウズベキスタン共和国は、中央アジアの中心に位置し、タシュケント・ヒバ・ブハラ・サマルカンドなど、古代からシルクロード上の要所として栄えてきた都市が多く、文化遺産も数多く所在している。19世紀後半からは、ロシア帝国、つづいてソビエト連邦の統治下にあったが、1991年のソ連崩壊後に独立を果たし、2011年で独立20周年を迎えた比較的若い国である（図1）。

旧ソ連統治下の中央アジアでは、ロシア人考古学者・専門家の主導により文化遺産の考古学調査研究・保存修復が行われてきたが、崩壊後は、政治的混乱・経済的立ち後れなどから、考古学や保存修復学など文化遺産の保護のための教育カリキュラムや研究環境整備が遅れた。そのために、文化遺産専門家が不足し、若手専門家の育成が十分に行われず、また、文化遺産そのものも顧みられず、放置されて荒れ放題の状況となり、その崩壊が目に見えて進行していったのである。

そこで、ウズベキスタン共和国で急務となっている若手考古学者や保存修復専門家の人材育成に貢献し、日本の優れた専門技術の移転を図るため、ウズベキスタン芸術アカデミーの要請を受けて、筆者は2008年から平山郁夫文化のキャラバンサライを拠点として文化遺産保護と人材育成のための教育事業を行ってきた。

2011年には、国際交流基金の本体事業として「ウズベキスタンにおける文化遺産保存修復技術実技講習」を実施した。

ここでは本ワークショップについて説明しながら、本ワークショップが遭遇している、海外で教育的な国際貢献を行う場合の問題点についても論究したい。

一. 経緯

1996年、当時 金沢大学（現中央大学）教授、田辺勝美氏を団長とするダルベルジン・テパの発掘調査がはじまり（調査主体は、2000年まで古代オリエント博物館・2001年以降、南ウズベキスタン考古学調査団）、筆者は1998年からこの発掘調査に参加した（図2）。



図1 中央アジア



図2 ダルベルジン・テパの調査



図3 2002年実測風景



図4 ACCUワークショップ

発掘調査に伴い、多量に出土した遺物の整理作業をどのように行うかが、当時の大きな課題となった。考古資料などの文化財は、海外持ち出しが禁止されており、ウズベク国内で、遺物の整理・実測・写真撮影などのレジストレーションを、限られた日程の中で、日本人だけで行うことは到底不可能だったからである。そこで、2002年から、現地の考古学・修復学専攻の学生に整理作業の手順や方法を教えて、遺物の修復や実測を実施してもらい、データを日本に持ち帰る事業を、平山郁夫国際文化のキャラバンサライの創設とともに始めたのであった。これが本ワークショップの前身である（図3）。

その後、この事業は、2006年から、当時、京都造形大学教授（現東北大学教授）芳賀満氏が団長で実施された、カンピル・テパの発掘調査に伴う出土遺物の整理作業にも活用されたため、事業として継続することとなった。

2008年に、ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）奈良事務所が、文化遺産ワークショップをウズベキスタン平山郁夫国際文化のキャラバンサライで開くこととなり、それにとまって、ウズベキスタン芸術アカデミーの要請を受けたこともあり、本事業も、名称を「ウズベキスタンにおける文化遺産保存修復技術実技講習」と変更し、土器実測に加え、保存修復基礎論・考古学基礎論など講義内容を増やして、内容を拡充し、ワークショップとして独立して行うことになった（図4）。

2009年度には文化財保護・芸術研究助成財団の助成をうけ、2010年度には、本体事業のパイロット事業として、国際交流基金から助成を受けて、ワークショップをおこなった。そして、2011年度、いよいよ国際交流基金の本体事業として、本ワークショップを行うことになったのである。

このように、本事業は、はじめからワークショップとして国際貢献を目標としてはじまったものではなく、いわば、日本側の必然によりはじまった教育活動であった。それが、ウズベク側の要請などにより、次第にワークショップとして昇華・拡充していったという経過をたどった。

二. 2011年度ワークショップの概要

本年度は、昨年までの実績をもとに事業内容を拡大し、国立歴史博物館において、実務にたずさ

わる保存修復者を対象とした、実際の遺物を使って実践的な講義を行う、保存修復のプロフェッショナルコースを、新たに行うこととした。そして、これまでの平山郁夫国際文化のキャラバンサライで行っていた考古学・保存修復学の基礎的なワークショップを、ベーシックコースとして行なった。

プロフェッショナルコースは、ベーシックコースで基礎を学んだのち、より専門性を高めた実践的なコースとして位置づけ、コーディネーターとしてサイバー大学教授・青木繁夫氏を迎えて創設した。

なお、主要協力団体・協力者と協力形態は以下の通りである。

主催：国際交流基金 国立歴史博物館 平山郁夫国際文化のキャラバンサライ

資金提供：国際交流基金

助成：文化財保護・芸術研究助成財団

助言：和光大学名誉教授 前田耕作 東京文化財研究所 山内和也

ウズベキスタン共和国文化・スポーツ省大臣 ツルスナリ・クズイエフ

国立芸術学研究所 シャキル・ピダーエフ

会場提供：平山郁夫国際文化のキャラバンサライ・国立歴史博物館

後援：ウズベキスタン共和国芸術アカデミー 国立芸術学研究所

協力：在ウズベキスタン日本大使館 在日ウズベキスタン共和国大使館

プロフェッショナルコース

プロフェッショナルコースは、講師として、サイバー大学教授・青木繁夫氏と、奈良文化財研究所・西大寺フォト写真家・杉本和樹氏を迎えて、ウズベキスタン科学アカデミー傘下の国立歴史博物館で、博物館で保存修復事業に従事している職員や実際に保存修復の経験を持つ学生16人を対象とし、ウズベキスタン国立博物館所蔵のファイアズ・テパの塑像を実際に修復しながら保存修復の理論や技術を実践的に習得するワークショップを行った。

(1) 実施日：2011年9月6日から9月14日

(2) 現地主催者：国立歴史博物館

(3) 開催都市・会場名：タシュケント 国立歴史博物館

(収容可能人数：30人)

(4) 参加者数：16人総数115人

実習という性格上、あらかじめ参加者定員を16人までに制限していた。

内訳

国立歴史博物館職員 2名

ベグザット記念芸術美術大学 約14名（2年生以上の修復経験者のみ）

(5) 実施内容

「ファイアズ・テパの塑像の修復実習」青木繁夫（サイバー大学教授）（図5）

「写真撮影実習」杉本和樹（奈良文化財研究所・西大寺フォト）（図6）



図5 青木氏講義風景



図6 杉本氏講義風景



図7 合意書へサイン



図8 プロフェッショナルコース終了

(6) 出席率80%以上の受講者に終了証明書を交付。本講座は参加大学の正規単位として認定された(図8)。

ベーシックコース

ベーシックコースはこれまで通り、ウズベキスタン芸術アカデミー傘下の平山郁夫国際文化のキャラバンサライで、大学や研究所の考古学専攻生・保存修復専攻生・博物館学芸員などの学生・若手研究者、合計51名を対象に、地元研究者と日本人研究者がチームを組み、ウズベキスタンの考古学の現状や、遺物の保存方法や実測の方法、考古学概論、考古学の調査研究方法、遺構遺物の修復技術、博物館学基礎論などの講義や実習を行った。日本側講師は、東京国立博物館・井上洋一氏、橿原考古学研究所・井上主税氏、大正大学・犬竹和氏、国土館大学・古庄浩明、ウズベク側講師は、陶芸家・シェルナザロフ・シャメイディン、グレートシルクロード編集長サフチュク・クルバノフ、芸術学研究所研究部長バホディール・ツルグノフ、芸術アカデミー情報と国際関係部部長ノディール・ノルマートフ、芸術学研究所研究部研究員アクマル・ウルマゾフである。

- (1) 実施日：2011年9月15日から10月1日
- (2) 現地主催者：平山郁夫国際文化のキャラバンサライ
- (3) 開催都市・会場名：タシュケント 平山郁夫国際文化のキャラバンサライ（図9）
（客席数もしくは収容可能人数：60人）
- (4) 参加者数：51人総数336人

内訳

タシュケント総合大学 約4名
 ウズベキスタン国民芸術専門学校 約40名
 ベグザット記念芸術美術大学 約5名
 国立テルメズ大学 1名
 国立軍事博物館 1名

(5) 講師と実施内容

「土器作り実習」 シェルナザロフ・シャメイディン（陶芸家）（図10）
 「ウズベキスタンと中国・シルクロードの経済と文化」・「世界の不思議とシルクロードの遺跡」
 サフチュク・クルバノフ（グレートシルクロード編集長・考古学者）
 「南ウズベキスタンにおける考古学の著名な発見」 バホディール・ツルグノフ（芸術学研究所
 研究部長）
 「スルハンダリア州の考古遺跡」 ノディル・ノルマートフ（芸術アカデミー情報と国際関係部
 部長）
 「土器実測実習」 芸術学研究所研究部研究員（アクマル・ウルマゾフ）（図11）
 「修復学基礎講座」 犬竹和（大正大学非常勤講師）
 「考古学の歴史と研究方法」 古庄浩明（国士舘大学非常勤講師）
 「発掘調査の方法について」 井上主税（檀原考古学研究所調査課主任）
 「博物館学基礎講座」 井上洋一（東京国立博物館企画部長）（図12）



図9 キャラバンサライ・バナー



図10 土器作り実習



図11 実測実習



図12 博物館学基礎講座

出席率80%以上の受講者に終了証明書を交付。本講座は参加大学の正規単位として認定された（図13）。

プロフェッショナルコース・ベーシックコースの講義内容をまとめたレジュメを出版した。また、今回のワークショップはテレビ・ラジオ・インターネットなどのメディアによって紹介された。



図13 修了証書授与式

三. 事業の評価

1. プロフェッショナルコースについて

全体としては予定通り事業が達成できた。しかし、ウズベク側との合意書締結に手間取り（図7）、講座の進行に支障が出て、最終日の後片付けが慌ただしくなってしまった。また、当初、受講生には博物館職員を予定していたが、職員よりも学生が多かったので、講義内容のレベルを落とさなければならなかった。このような状況で、予定通りの事業が行えたのは、青木・杉本、両氏共にワークショップの運営や参加の経験が豊富で、いわゆる「現場での対応力」があったためである。

国立歴史博物館側も、合意書締結には時間がかかったが、会場の提供・機材の貸し出しなど、事業の運営には協力的であった。来年の開催についても、強い要請を受け、博物館館長からのサポートレターをいただいた。さらに、ウズベク側から、「修復した遺物を含む、ウズベクの文化財の展示会を、ウズベクと日本で行ったらどうか」という提案もあり、今後、新たな発展を見込めそうである。

受講者からは、アンケートの結果、新しい知識を得られたという意見が多く寄せられた。また、来年も是非やってほしいとの意見も多かった。

ウズベキスタンにおいては、独立後20年、保存修復学の情報はもたらされておらず、独立以前の理論と材料で、細々と保存修復を続けているのが現状である。したがって、近年の新しい保存修復学の理論と実践を学ぶことができることに、大きな反響があった。

参加者アンケートの結果報告 回答数13名

とても満足	まあ満足	やや不満	とても不満
10名	3名	0名	0名

反省事項

今回の大きな問題は、二つである。

一つは歴史博物館との合意書締結が遅れたことである。その原因は、歴史博物館の上部機関である、科学アカデミー総裁が、合意書の「ワークショップの成果を共有する」という条文中に、情報漏洩の疑念を抱いたことにあった。

来年以降も合意書を締結して事業を行う予定であるので、本事業の内容を丁寧に説明すると共に、以下のような対策をとることにした。

1. UNESCOに協力を求め、UNESCOから科学アカデミー総裁あてに本ワークショップへの許可を与えるようにサポートレターを出してもらうことにした。
2. 大統領の令嬢が主催するフォンド・フォーラムに協力を求め、フォンド・フォーラムからもサポートレターをもらうことにした。
3. 在日ウズベキスタン大使館を通じてウズベキスタン外務省から科学アカデミーへ、早めに話をしてもらうことにした。
4. 在ウズベク日本大使館を通じて、ウズベキスタン外務省から科学アカデミーへ、話をしてもらうようにお願いする。

二つめの問題点は、当初、博物館職員クラスの受講生を予定していたが、実際には大学生が大半となってしまったことである。この国においては、博物館職員など、文化的職業についた人びとの賃金は、他の職業に比して安い。したがって、博物館職員クラスは、彼らの生活保障と交通費・宿泊代を用意しなければワークショップに参加することはできない。これについては、今後、検討の必要がある。

青木繁夫氏の言葉を引用すると、「プロフェッショナルコースは、その成果として、①受講生の知識の再構築をすることと、②ファイアズテパの塑像を修復し展示できるようにして本事業を一般に周知すること」の2つの目的があるという。2番目の目的を達成するには、2週間程度の時間では物理的に不可能で、日本人講師がいない間でも、現地の受講者が日本人講師の指導にしたがって継続的に作業を進められるような体制をとることが望ましいと考えられる。

2. ベーシックコースについて

ベーシックコースにおいても予定していた事業はすべて実行できた。しかし、当初、学生があまり集まらなかった。その原因は、ウズベキスタン芸術アカデミーの事務的な手続きミスにより、大学側へ本ワークショップへの参加要請が遅れたためである。また、この遅れが原因となって、大学生よりも若い、芸術専門学校の学生が多くなった結果、講義内容も対象年齢をさげたものに変更した。

受講生が自分で作成した土器を、自分で実測するという、土器の作成方法と、考古学的実測方法を十分に理解できるカリキュラムを組んでいるため、受講生には大変好評であった。また、本年度から新たに開講した博物館学は、ウズベキスタンではまだあまり馴染みのない学問であるので、新しい知識を得られ、文化財の重要性が理解できたという意見がよせられ、反響が大きかった。

本ワークショップは参加大学の正規単位として認定されているので、終了証明書は有効なもの見なされており、学生がこぞって受講するようになってきた。また講義内容の有用性も認知され、引率の先生からも、「勉強になったので、私にも証明書がほしい」という要望が出されたほどであった。

参加者・来場者アンケートの結果報告 回答数35名

とても満足	まあ満足	やや不満	とても不満
31名	4名	0名	0名

出席率80%以上の受講者に終了証明書を交付。本講座は参加大学の正規単位として認定された。

ベーシックコースは、その前身事業も含めて10年の実績があり、ノウハウもある程度確立されている。また、いままでに、ウズベキスタン国内の大学や博物館に考古学・保存修復の専門家として人材を輩出しており、ウズベク側にも本ワークショップが認知されてきている。今回は、本ワークショップの評判を聞き及んで、テルメズ大学の学生が自費で参加するほどであった。

ウズベク側も本ワークショップの重要性を理解しはじめ、パートナーとして積極的に参画する意志を示すようになってきている。その現れとして、平山郁夫国際文化のキャラバンサライ側から、カンカ遺跡を調査し、発掘実習を行い、さらにその出土遺物を整理・保存修復して展示するという考古学の一連の流れを全て網羅したワークショップを提案されている。この提案では、以前のように経費の全てを日本側に求めるものではなく、「ウズベク側も出せるものは出す」という態度に変わってきており、パートナーとして本事業に積極的に参加し、経費や責任も次第に負担してもらえるようになってきている。すくなくとも、平山郁夫国際文化のキャラバンサライにおいては、日本側にお金や機材を要求する段階から、事業の重要性を認識し、一定の責任を果たそうとする、次のステージへと進んで来ている状態である。

なお、カンカ遺跡は、玄奘三蔵も立ち寄り、『大唐西域記』「石国」と記した、旧タシュケントに比定された遺跡であり、ウズベク側だけではなく、シルクロードを通じて仏教や西欧的文化を受容した日本にとっても、特に重要な遺跡の一つである。

反省事項

今回の問題点は、ウズベキスタン芸術アカデミーが事務的な手続きミスにより、大学側へ本ワークショップへの参加要請が遅れた点である。この原因は、前芸術アカデミー総裁が6月に文化・スポーツ省大臣に昇格したことにより、芸術アカデミー総裁の地位が空白で、指揮命令系統が十分に機能していなかったという、ウズベク側の組織の問題であった。次回までには、新芸術アカデミー総裁も決定するであろうから、組織も落ち着いて、指揮命令系統も機能し始めると思われる。

3. 全体としての評価

今回、ベーシックコースとプロフェッショナルコースという2段階のワークショップを実施することが出来るようになった。このことにより、考古学・保存修復学の基礎教育から実践教育まで、大枠としての体系的プログラムを確立できたと考えている。

ベーシックコースは、毎年、50人～60人程度の学生が受講してくれており、考古学・保存修復学の道を歩むものばかりではなく、それぞれいろいろな方面に進むことになる。彼らは本ワークショップに参加したことにより、考古学・保存修復学に対する理解を深める事になったばかりではなく、日本や日本人に対して理解を示し、親近感を持って、各方面で「日本のサポーター」となってくれている。

プロフェッショナルコースにおいては、文字通り保存修復学の専門家を実践的に育成するもので、数年以内にその成果が現れてくるものであり、即効性のある国際貢献ということができよう。

各国には、それぞれの歴史があり、民族のプライドがある。いくら先進の技術や学問を持って技術移転しようとしても、受け入れ国側の技術的・経済的・文化的レベルが対応していなければ、いわゆる「猫に小判」という状態になる。さらに、受け入れ先の国の人びとの感情やプライドを逆撫でしては日本に対する反感を買い、逆効果である。海外貢献を考える場合、もっとも注意しなければならないことは、相手方の歴史的・文化的背景を理解し、状況を把握して、相手方に見合った貢献の仕方をするところであろう。ワークショップなどの場合、双方の国の研究者が同等の立場で学生に教えることによって、お互い尊敬しあえる関係をつくることが重要である。特に多民族国家で、数カ国語が日常的に使われている国においては細心の注意が必要である。

本事業に限らず、ワークショップや海外調査などは、資金の調達が最も大きな課題である。資金調達が出来れば、事業は50%以上成功したといえよう。今回は、国際交流基金の本体事業としていただいたおかげで、また、文化財保護・芸術研究助成財団から助成を受けられたこともあり、比較的スムーズに事業を進めることができた。日本から派遣された隊員の生活面に関しても、今回はホテルに宿泊することができ、アパートでプライバシーもない不自由な共同生活を送っていた、それ以前とは比較にならないほど充実したものとなった。しかし、数年間の国際交流基金の約束はあるものの、長期的に見ると、資金調達に関しては不安定で、不明確である。教育活動という事業の性

格上、長期的視野に立った、資金的支援を望みたいし、また、そのような支援体制が日本に確立されることを望みたい。資金調達のめどが立たず、短期で事業を終了してしまうのでは、教育的効果が上がり、相手国に対して無責任な結果となり、日本側の自己満足のための事業となってしまうかねない。

四. 今後の展望

観光が大きな収入源となっているウズベキスタンでは、文化財に対する意識もしだいに高くなっている。しかし、その保存技術や理論は、まだ未熟である。今後、文化財の保存修復・考古学的技術・理論に対する欲求は高まってくることは明確である。しかし、文化財の保存修復・考古学調査などに当たって、外国からの輸入にたよる高価な材料と高価な器具でしか調査・修復ができないのであれば、現地では根付くことはなく、海外の資本・技術に頼りっきりになってしまう。現地事情に即した、調査・修復の技術を確立し、ワークショップとして伝達していくことが急務であろう。

ウズベキスタン側からは、本事業を今後も継続して行うことを強く望まれている。さらには、タシュケントだけではなく、ウズベキスタン第2・第3の都市である、サマルカンドやテルメズでも本事業をやってほしいという要望をうけている。

ウズベキスタンに限らず、周辺の中東アジア諸国からも、本ワークショップに各国の研修生を受け入れるか、もしくは同等の事業を各国で行うように要望されており、今後、中央アジア各国に本事業を拡大出来ればと考えている。本事業を中央アジア各国に広げた場合、各国の社会事情や民族意識に注意して、その国の事情にあったカリキュラムを用意する必要がある。

本事業は、将来的には、大統領選出国会議員で、著名な歴史学者である、ルトベラーゼ博士など、ウズベキスタン共和国側から、その設立を強く要請されている、仮称シルクロード文化財保存修復研究センターの設立を目指している。

仮称シルクロード文化財保存修復研究センターとは、平山郁夫先生が志向された文化遺産の保護という、日本の国際貢献の形の一つであり、中央アジア各国の文化遺産保存修復を行いつつ、日本の優れた専門技術の移転と人材育成をおこなう恒久的な教育機関である。

この機関を、文化遺産国際協力コンソーシアムの前田耕作先生や東京文化財研究所の山内和也氏が、タシュケントに設立しようと実現化を目指しており、本事業は、この仮称シルクロード文化財保存修復研究センター構想の基礎となるべく、今後もその活動を行っていきたい。

おわりに

教育は、長い年月をかけて、はじめて成果が現れる。しかし、一度その成果が現れると、それまでにかけた年月や労力の何十倍もの成果が期待できる。10年前、本事業の前進に参加した学生が、やっと社会的地位を持ち始め、歴史博物館副館長や芸術学研究所研究員となって、日本隊の行う各種事業に協力してくれるようになってきたところである。このように、本ワークショップはようや

っとその成果が実を結び始めたところであり、今後も継続することによって、さらに大きな成果が上げられる状態になってきたといえる。さらに、次の10年ではウズベキスタンの考古学・保存修復研究者のほとんどが、何らかの形で日本からその技術・理論を学んだことになり、「ウズベキスタン共和国の考古学および文化遺産保存修復学は日本から学んだ」と伝えられるようになると思われる。また、その技術で修復された遺跡・遺物が、ウズベキスタン国内で多く見ることができるようになり、ウズベク国内の人はもとより、観光で訪れた多くの外国の人びとにも日本の国際貢献の成果をアピールできるようになろう。このように、教育的な国際貢献とは、「継続して行うこと」によって大きな成果を生むことになるのである。そのためにも、仮称シルクロード文化財保存修復研究センター構想と、その実現は、これからの日本の文化的国際貢献のあり方の指針となるものと考えている。

本稿は2011年11月22日に行われた、文化遺産国際協力コンソーシアム 中央アジア・東アジア分科会での発表をもとに文書化したものである。

参考文献

- 古庄浩明 2009「中央アジア・ウズベキスタンにおける遺構保存の現状と課題」『21世紀アジア学会紀要』第7号 国士舘大学21世紀アジア学会
- 古庄浩明 2010「ウズベキスタン共和国・スルハンダリア地域の仏教遺跡とGPSデータ」『第17回ヘレニズム～イスラーム考古学研究』ヘレニズム～イスラーム考古学研究会



2002年ワークショップ



2002年ワークショップ



芸術学研究所研究員



国立歴史博物館副館長



芸術学研究所研究員



国立歴史博物館修復者



芸術学研究所修復者



2007年ワークショップ

国立テルメズ考古博物館修復者

修復者

ワークショップ出身考古学者・保存修復者